

# 行幸

## 渋谷栄一訳

### 第一章 玉鬢の物語 冷泉帝の大原野行幸

#### 「第一段 大原野行幸」

このようにお考えの行き届かないことなく、何とかよい案はないかと、ご思案なさるが、あの音無の滝ではないが、嫌で気の毒なことなので、南の上のご想像通り、身分にふさわしくないご醜聞である。あの内大臣が、何ごとにつけても、はつきりさせ、少しでも中途半端なことを、我慢できずにいらつしやるようなご気性なので、そうなら誰はばからず、はつきりとしたお婿扱いなどなされたりしたら、世間の物笑いになるのではないか」などと、お考え直しなさる。

その年の十二月に、大原野の行幸とあって、世の中の人は一人残らず見物に騒ぐのを、六条院からも御夫人方が引き連ねて御覧になる。卯の刻に御出発になって、朱雀大路から五条大路を西の方に折れなさる。桂川の所まで、見物の車がびつしり続いている。

行幸といつても、かならずしもこんなにはないのだが、今日は親王たちや、上達部も、皆特別に気をつかつて、御馬や鞍を整え、隨身、馬副人の器量や背丈、衣装をお飾りお飾りになっては、見事で美しい。左右の大内、内大臣、大納言以下、いうまでもなく一人残らず行幸に供奉なさった。麴塵の袍に、葡萄酒染の下襲を、殿上人から五位六位までの人々が着ていた。

雪がほんの少し降って、道中の空までが優美に見えた。親王たち、上達部なども、鷹狩に携わつていらつしやる方は、見事な狩のご装束類を用意なさっている。近衛の鷹飼どもは、それ以上に見たことのない摺衣を思い

思いに着て、その様子は格別である。素晴らしく美しい見物をと競つて出て来ては、大した身分でもなく、お粗末な脚の弱い車など、車輪を押しつぶされて、気の毒なものもある。舟橋の辺りなどにも優美にあちこちする立派な車が多かった。

#### 「第二段 玉鬢、行幸を見物」

西の対の姫君もお出かけになった。大勢の我こそはと綺羅を尽くしていらつしやる方々のご器量や様子を御覧になると、帝が赤色の御衣をお召しになって、凜々しく微動だになさらない御横顔に、ご比肩申し上げる人もいない。

わが父内大臣を、こつそりとお気をつけて拝見なさつたが、派手で美しく、男盛りでいらつしやるが、限界があつた。たいそう人よりは優れた臣下と見えて、御輿の中以外の人には、目が移りそうもない。

ましてや、美男だとか、素敵な方などと、若い女房たちが死ぬほど慕っている中将、少将、何とかいふ殿上人などの人は、何ほどのこともなく眼中にないのは、まったく群を抜いていらつしやるからなのであつた。源氏の太政大臣のお顔の様子は、別人とはお見えにならないが、気のせいかも少し威厳があつて、恐れ多く立派である。

そうしてみると、このような方はいらつしやりにくいのであつた。身分の高い人は、皆美しく感じも格別よいはずのものとはばかり、大臣や、中将などのお美しさに見慣れていたので、見劣りした者たちでまともな者はないのであるうか、同じ人の目鼻とも見えず、悔しいほど圧倒されていることだ。

兵部卿宮もいらつしやる。右大将が、あれほど重々しく気取っているのも、今日の衣装がたいそう優美で、やなぎいなどを背負つて供奉なさつていた。色黒く鬚が多い感じに見えて、とても好感がもてない。どうして、女性の化粧した顔の色に男が似たりしようか。とても無理なことを、お若い方の考えとて、軽蔑なさつたのであつた。

大臣の君がお考えになつておつしやることを、どうしたものか、宮仕えは、不本意なことで見苦しいことではないかしら」と躊躇していらつしやつたが、帝の寵愛ということを離れて、一般の宮仕えしてお目通りするなら

ば、きつと結構なことであろう」といふ、お気持ちになった。

「第三段 行幸、大原野に到着」

こうして、大原野に御到着あそばして、御輿を止め、上達部の平張の中で食事を召し上がり、御衣装を直衣や、狩衣の装束に改めたりなさる時に、六条院からお酒やお菓子類などが献上された。今日供奉なさる予定だともってご沙汰があったのだが、御物忌の理由を奏上なさったのであった。

蔵人で左衛門尉を御使者として、雉をつけた一枝を献上あそばさされた。仰せ言にはどのようにあつたか、そのような時のことを語るのは、わずらわしいことなので。

「雪の深い小塩山に飛び立つ雉のように古例に従って今日はいらっしゃればよかつたのに」

太政大臣が、このような野の行幸に供奉なさった先例があつたのであるうか。大臣は、御使者を恐縮しておもてなしなさる。

「小塩山に深雪が積もつた松原に今日ほどの盛儀は先例がないでしょう」と、その当時に伝え聞いたことで、ところどころ思い出されるのは、聞き間違いがあるかもしれない。

「第四段 源氏、玉鬘に宮仕えを勧める」

翌日、大臣は、西の対に、

「昨日、主上は拝見なさいましたか。あの件は、その気におなりになりましたか」

と申し上げなされた。白色紙に、たいそう親しげな手紙で、ごまごまと色めいたことも含まれてないのが、素晴らしいのを御覧になって、

「いやなことを」

とお笑いなさるものの、よくも人の心を見抜いていらっしゃるわ」とお思いになる。お返事には、

「昨日は、雪が散らつて朝の間の行幸でははつきりと日の光は見えません

でしたはつきりしない御ことばかりで」とあるのを、紫の上も御覧になる。

「しかしかのことを勧めたのですが、中宮がああしていらっしゃるし、わたしの娘という扱いのままでは不都合であろう。あの内大臣に知られても、弘徽殿の女御がまたあのようにいらっしゃるのだからなどと、思い悩んでいたことです。若い女性で、そのように親しくお仕えするのに、何も遠慮する必要がないのは、主上をちらとでも拝見して、宮仕えを考えない者はないでしょう」

とおっしゃると、

「あら、嫌ですわ。いくら御立派だと拝見しても、自分から進んで宮仕えを考えるなんて、とても出過ぎた考えでしょう」

と言つて、お笑いになる。

「さあ、そういうあなたこそ、きつと熱心になることでしょう」

などとおっしゃつて、改めてお返事に、

「日の光は曇りなく輝いていましたのにどうして行幸の日に雪のために目を曇らせたのでしょうか、ご決心なさい」

などと、ひつきりなしにお勧めになる。

「第五段 玉鬘、装着の準備」

「何はともあれ、まずは御装着の儀式を」とお思いになって、そのご用意の御調度類の、精巧で立派な品々をお加えになり、どういった儀式であれ、自分では大して考えていらっしゃらないことでも、自然と大げさに立派になるのを、まして、内大臣にも、このまま儀式の機会にお知らせ申そうかとお考え寄りになったので、たいそう立派である。「年が明けて、一月に」とお考えになる。

「女性というものは、評判が高く、名をお隠しできる年頃ではなくとも、誰かの姫君として、深窓にこもつていらっしゃる間は、必ずしも氏神への参詣なども、表立つてしないので、今までは分らないように過していらつしゃつたが、この、もし今考えていることが実現したら、春日明神の御心に背いてしまつし、結局は隠しおおせるものではないから、つまらないこと

に、格別の計略があったことのように後々まで取り沙汰されては、おもしろからぬことだろう。並の人の身分なら、当世ふうとしては、氏を改めることも簡単なものだが、などとご思案なさるが、親子のご縁は、絶えるようなことはないものだ。同じことなら、こちらから進んで、お知らせ申そう」などとご決心なさって、この儀式の御腰結役には、その内大臣をと、お手紙を差し上げなされたところ、大宮が、去年の冬頃から病気をなさっていたが、一向によくおなりにならないので、このような場合では、都合がつかない旨を、お返事申された。

中将の君も、昼夜、三条宮邸に伺候なさっていて、心に余裕もなくいらつしやるので、時機が悪いのを、どうしたものか、とお考えになる。

「世の中も、まことに無常なものだ。大宮がお亡くなりにあそばしたら、御喪に服さなければならぬのに、知らない顔をしていらつしやったら、罪深いことが多かるう。生きていらつしやるうちに、このことを打ち明けよう」とお考えになつて、三条宮邸に、お見舞いかたがたお出かけになる。

## 第二章 光源氏の物語 大宮に玉鬘の事を語る

### 「第一段 源氏、三条宮を訪問」

今は以前にもまして、目立たないようになさつたが、行幸に負けないほど敵めしく立派で、ますます光輝くばかりのお顔立ちなどが、この世では見られないほどの感じがして、素晴らしいと拝見なさるにつけては、ますますご自分の悪さも、取り除かれたような気持ちが出て、起きて座わりになつた。御脇息に寄りかかりなされて、弱々しそつであるが、お話などはいそつよく申し上げなさる。

「お悪くはいらつしやしませんのに、某の朝臣が気を動転させて、仰々しくお嘆き申しているようでしたので、どのようにいらつしやるのかと、ご心配申し上げておりました。宮中などにも、特別な場合でない限りは参内せず、朝廷に仕える人らしくもなく籠もつておりますので、何事も不慣れで大儀に思つております。年齢など、わたし以上の人で、腰が辛抱できない

ほど曲がつても動き回る例は、昔も今もございませうですが、妙に愚かしい性分の上に、物臭になつたのでございませう」

「年老いたための病氣と存じながら、ここ数か月になつてしまいました。今年になつてからは、望みも少なそうに思われますので、もう一度、このうにお目にかかりお話し申し上げることもないのではなかるうかと、心細く存じておりましたが、今日は、再びもう少し寿命も延びたような気が致します。今はもう惜しむほどの年ではございませぬ。親しい人たちにも先立たれ、年老いて生き残っている例を、他人の身の上として、とても見苦しいと見ておりましたので、後世への出立の準備が、気になつておりますが、この中将が、とても真心こめて不思議なほどよくお世話し、心配してくださるのを見ましては、あれこれと心を引き留められて、今まで生き延びております」

と、ただお泣きになるばかりで、お声が震えているのも、ばかばかしく思うが、無理のないことなので、まことにお気の毒なことである。

### 「第二段 源氏と大宮との対話」

お話など、昔のこと今のことなどあれこれとりまぜて申し上げなさる折に、

「内大臣は、日を置かず参上なさることは多いでしょうから、このような機会にお目にかかれたら、どんなに嬉しいことでしょう。ぜひともお知らせ申し上げたいと思うことがございますが、しかるべき機会がなくては、お目にかかることも難しいので、気になつております」

と申し上げなさる。

「公務が忙しいのでしようか、孝心が深くないのでしようか、それほど見舞いにも参りませぬ。おつしやりたいことは、どのようなことでしょうか。中将が恨めしく思っていることもございますが、初めのことは知らないが、今となつて二人を引き離そうとしたところで、いったん立つた噂は、取り消せるものではなし、ばかげたようで、かえつて世間の人も噂するというものを」などと言いましたが、一度言い出しことは、昔から後に引かない性

格ですから、分かってくれないように見受けられます」

「この中将のこととお思いになつておっしゃるので、にっこりなされて、今さら言つてもしかたのないことと、お許しになることもあろうかと聞きまして、わたくしまでがそれとなく口添え申したようなことがありました、たいそう厳しくお諫めになる旨を拝見しまして後は、どうしてそんなにまで口出しを致したのだらうかと、体裁悪く後悔致しております。

万事につけて、清めということがございますので、何とかして、元通りにきれいさっぱり水に流してくだらないことがあるうかとは存じながら、このように残念ながら濁り淀んでしまつた末には、いくら待ち受けても深く澄むような水というものは出て来にくいものなのでしょう。何事につけても、後になるほど、悪くなつて行き易いもののようにございます。お気の毒なことを存じます」

などと申し上げて、

「第三段 源氏、大宮に玉鬘を語る」

「実は、あの方がお世話なさるはずの人を、思い違ひがございまして、思いがけず捜し出しましたが、その時は、そうした間違ひだとも言つてくれなかつたものでしたから、しいて事情を詮索することもしませんが、ただそのような子どもが少ないので、口実であつても、何かまうものかと大目に見まして、少しも親身な世話もしませんで、年月が過ぎましたが、どのようにしてお聞きあそばしたのでしょうか、帝から仰せになることがございました。

尚侍として、宮仕えする者がいなくては、あの役所の仕事は取り締まられず、女官なども公務を勤めるのに頼り所がなく、事務が滞るようであつたが、現在、帝付きの老齢の典侍二人や、また他に適当な人々が、それぞれに申し出ているが、立派な人をお選びあそばそうとするのに、その適任者がいない。

やはり、家柄も高く、世間の評判も軽くはなく、家の生活の心配のない人が、昔からなつてきている。仕事ができて賢い人という点での選考ならば、そういう人でなくとも、長年の功勞によつて昇任する例もあるが、それ

に当たる者もないとなると、せめて世間一般の評判によつてもお選びあそばそうと、内々に仰せられました、似つかわしくないことだと、どうしてお思いになるでしょう。

宮仕えというものは、帝の恩顧を期待して、身分の高い者も低い者も出仕するというのが、理想が高いというものです。一般職の役職に就いて、そうした所の役所を取り仕切り、公事に関する事務を処理するようなことは、何でもない、重々しくないように思われていますが、どうしてまたそのようなことがありましようか。ただ、自分自身の心がけ次第で、万事決まるようでございます。うとうとうというふうには、気持ち傾いてきましたところ、年齢を尋ねましたところ、あの大臣がお引き取りになるはずの人であることが分かりましたので、どうしたらよいことかと、はつきりとご相談申し上げます。すぐこれこれしかじかのことをと、打ち明けて申し上げますべく手立てを考えて、お手紙を差し上げたのですが、ご病氣のことを口実にして、億劫がつて辞退なさいました。

なるほど、時期も悪いと思ひ止まつていたのですが、ご病氣もよろしくいらつしやるようですから、やはり、このように考え出しました機会にと存じております。そのようにお伝え下さいませ」

と申し上げなさる。宮、

「それは、それは、一体どうしたことでございますか。あちらでは、いろいろこのような名乗つて出て来る人を、かまわずに迎え取つていますが、どのような考えで、このように間違えて申し出たのでしょうか。近年になつてから、お噂を伺つて、お子になつたのでしょうか」

と、お尋ねなさるので、

「それにはそれなりの訳がございますのです。詳しい事情は、あの大臣も自然とお分かりになるでしょう。ごたごたした身分の女との間によくあるような話ですから、事情を明かしても、喧しく人が噂するでしょうから、中将の朝臣にさえ、まだ事情を知らせておりません。人にはお漏らしになりませんように」

と、お口止め申し上げなさる。

「第四段 大宮、内大臣を招く」

内大臣、このように三条宮に太政大臣がお越しになっていらつしやる由、お聞きになって、

「どんなに人少なな状態で、威勢の盛んな御方をお迎え申されているのだらう。御前駆どもを接待し、お座席を、整える女房も、きつと気の利いた者はいないだらう。中将は、お供をなさっていることだらう」

などと、驚きなさつて、「ご子息の公達や、親しく出入りしているしかるべき廷臣たちを、差し向けなさる。

御果物や、御酒など、しかるべく差し上げよ。自分自身も参上しなければならぬが、かえつて大騒ぎになるだらう」

などとおつしやているところに、大宮のお手紙がある。

「六条の大臣がお見舞いにいらつしやっているが、人少なな感じが致しますので、人目も体裁も悪く、もつたいなくもあるので、仰々しくこのように申し上げたようにはなく、お越しになりませんか。お目にかかつて申し上げたいそんなこともあるそうです」

と、お申し上げなされた。どのようなことだらうか。この姫君のおんこと、中将の苦情だらうか」とお考えめぐらしになって、「宮もこのように余命少なげで、このことをしきりにおつしやり、大臣も穏やかに一言口に出して訴えておつしやるならば、とやかく反対申すことはしまい。平気な顔をして深く思い悩んでいないのを見るのは面白くないし、適当な機会があつたら、相手のお言葉に従つた顔をして二人の仲を許そう」とお考えになる。

「お二人が心を合わせておつしやるうとすることだな」とお思いになると、ますます反対のしようのないことだが、また、どうしてすぐに承知する必要があるうか」と躊躇されるのは、じつによからぬあいにくなご性分である。しかし、宮がこのようにおつしやり、大臣も会おうとお待ちになつて

いるとか、どちらに対しても恐れ多い。参上してからご意向に従おう」

などとお考え直して、「ご装束を特に気をつけ整えなさつて、御前駆なども仰々しくなくしてお出かけになる。

「第五段 内大臣、三条宮邸に参上」

「ご子息方をたいそう大勢引き連れてお入りになる様子、堂々として頼もしげである。背丈も高くていらつしやるうえに、肉づきも釣り合つて、たいそう落ち着いて威厳があり、お顔つき、歩き方、大臣というに十分でいらつしやる。

葡萄染の御指貫、桜の下襲、たいそう長く裾を引いて、ゆつたりとことさらに振る舞つていらつしやるのは、ああ何とご立派なお見えになるが、六条殿は、桜の唐の綺の御直衣、今様色の御衣を重ねて、くつろいだ皇子らしい姿が、ますます喻えようもない。一段と光輝いていらつしやるが、このようにきちんと衣装を整えていらつしやるご様子には、比べものにならないお姿であつた。

「ご子息たちは次々と、まことに美しいご兄弟で、集まつていらつしやる。藤大納言、春宮大夫などと、今では申す方のご子息方も、みな大きくなつてお供していらつしやる。自然と、特別ではないが、評判が高く身分の高い殿上人、蔵人頭、五位の蔵人、近衛の中将、少将、弁官など、人柄が派手で立派な、十何人が集まつていらつしやるので、堂々としていて、それ以下の普通の人も多くいるので、杯が何回も回り、みな酔つてしまつて、それぞれがこのように幸福が誰よりも勝れていらつしやるご境遇を話題にしていた。

「第六段 源氏、内大臣と対面」

大臣も、ひさしぶりのご対面に、昔のことを自然と思ひ出されて、離れていてこそ、ちょっとしたことにつけても、競争心も起きるようだが、向かい合つてお話し申し上げなされると、お互いにたいそうしみじみとしたことの数々が思ひ出されなさつて、いつもの、心の隔てなく、昔や今のことがらや、長年のお話しに、日が暮れて行く。お杯などお勧め申し上げなさる。

「お見舞いに何わなくてはいけないことでしたが、お呼びがないので遠慮致しておりまして。お越しを承りながら参りませんでしたら、お叱り事が増えたことでしょうか」

とお申し上げになると、

「お叱りは、こちらの方です。お怒りだと思つことがたくさんございます」

などと、意味ありげにおっしゃると、あの姫君のことだろうかとお思いになつて、厄介なことだと、恐縮した態度でいらつしやる。

「昔から、公私の事柄につけて、心に隔てなく、大小のことを申し上げたり承つたりして、羽翼を並べるようにして、朝廷の御補佐も致そうと存じておりましたが、年月がたちまして、その当時考えておりました気持ちと違つようなこと、時々出て来ましたが、内々の私事でしかありません。」

それ以外のことでは、まったく変わるところはありません。特に何といふこともなく年をとつて行くにつれて、昔のことが懐しくなつたのに、お目にかかることもほとんどなくなつて行くばかりですので、身分柄きまりがあつて、威儀あるお振る舞いをしなければとは存じながらも、親しい間柄では、そのご威勢もお控え下さつて、お訪ね下さつたらよいのにと、恨めしく思うことが度々ございます。」

とお申し上げなされると、

「昔は、おっしゃる通りしげしげお会いして、何とも失礼なまでにいつも一緒申して、心に隔てることなくお付き合ひいただきましたが、朝廷にお仕えた当初は、あなたと羽翼を並べる一人とは思ひもありませんで、嬉しいお引き立てをば、大したこともない身の上で、このような地位に昇りまして、朝廷にお仕え致しますことに合わせても、有り難いと存じませぬのではありませんが、年をとりますと、おっしゃる通りつい怠慢になることばかりが、多くございました。」

などと、お詫びを申し上げなされる。

その機会に、ちらと姫君のことをおっしゃつたのであつた。内大臣、  
「まことに感慨深く、またとなく珍しいことでございますね」と、何よりも先お泣きになつて、

「その当時からどうしてしまつたのだろうかと捜しておりましたことは、何の機会でもございましたでしょうか、悲しさに我慢できず、お話しお耳に入れましたような気が致します。今このように、少しは一人前にもなりましてつまらない子供たちが、それぞれの縁故を頼つてうるうる致しておりますのを、体裁が悪く、みつともないと思つておりますにつけても、またそれはそれとして、数々いる子供の中では、不憫だと思われる時々につけても真つ先に思い出されるのです。」

とおっしゃるのをきつかけに、あの昔の雨夜の物語の時に、さまざまに語つた体験談の結論をお思い出しになつて、泣いたり笑つたり、すっかり打ち解けられた。

「第七段 源氏、内大臣、三条宮邸を辞去」

夜がたいそう更けて、それぞれお別れになる。

「このように参上して一緒しては、まったく、古くなつてしまつた昔の事が、自然と思ひ出されて、懐しい気持ちを抑えきれずに、帰る気も致しません。」

とおっしゃつて、決して気弱くはいらつしやらない六条殿も、酔い泣きなのか、涙をお流しになる。宮は宮で言つまでもなく、姫君のお身の上をお思い出しになつて、昔に優る立派な様子、ご威勢を拝見なされると、悲しみが尽きないで、涙をとどめることができず、しおしおとお泣きになる尼姿は、なるほど格別な風情であつた。

このようなよい機会であるが、中将のおんことは、お口に出さずに終わつてしまつた。一ふし思ひやがりがないとお思ひであつたので、口に出すことも体裁悪くお考えやめになり、あの内大臣はまた内大臣で、お言葉もないに出過ぎることができずに、そうはいうものの胸の晴れない気持ちがなされるのであつた。

「今夜もお供致すへきでございますが、急なことでお騒がせしてもいかかかと存じます。今日のお礼は、日を改めて参上致します。」

とお申し上げなされると、

「それでは、こちらの病氣もよろしいようにお見えになるので、きつと申上げた日をお間違えにならず、お出で下さるようじ。」

とのこと、お約束なされる。

お二人方のご機嫌も良くて、それぞれがお帰りになる物音、たいそう盛大である。ご子息たちのお供の人々は、

「何があつたのだろうか。久し振りのご対面で、たいそうご機嫌が良くなつたのは。」

「また、どのようなご譲与があつたのだろうか。」

第三章 玉鬘の物語 裳着の物語

などと、勘違いをして、このようなこととは思ひもかけなかつたのであつた。

「第一段 内大臣、源氏の意向に従う」

内大臣は、さうそくとても見たくなつて、早く会いたくお思ひになるが、さうと、そのように迎え取つて、親らしくするのも不都合だろう。捜し出して手にお入れになつた当初のことを想像すると、きつと潔白なまま放つておかれることはあるまい。れつきとした夫人方の手前を遠慮して、はつきりと愛人としては扱わず、そうはいつても面倒なこと、世間の評判を思つて、このように打ち明けたのだろう」

とお思ひになるのは、残念だけれども、そのことを瑕としなくてはならないことだろう。こちらから進んで、あちらのお側に差し上げたとしても、どうして評判の悪いことがあるつか。宮仕えなさるようなことになつたら、女御などがどうお思ひになることも、おもしろくないことだ」とお考えになるが、とすらにせよ、決定されおつしやつたことに背くことができようか」

と、いろいろとお考えになるのであつた。

このようなお話があつたのは、二月上旬のことであつた。十六日が彼岸の入りで、たいそう吉日であつた。近くにまた吉日はないと占い申した上に、宮も少しおよろしかつたので、急いでご準備なさつて、いつものようにお越しになつても、内大臣にお打ち明けになつた様子などを、たいそう詳細に、当日の心得などをお教え申し上げなさると、

「行き届いたお心づかいは、実の親と申しても、これほどのことはあるまい」とお思ひになるもの、とても嬉しくお思ひになるのであつた。

こつして以後は、中将の君にも、こつそりとこのような事実をお知らせなさつたのであつた。

「妙なことばかりだ。知つてみればもつともなことだ」

と、合点のゆくことがあるが、あの冷淡な姫君のご様子よりも、さらに

たまらなく思ひ出されて、思ひも寄らないことだつた」と、ばかばかしい気がする。けれども、あつてはならないこと。筋違いなことだ」と、反省することは、珍しいくらいの誠実さのようである。

「第二段 二月十六日、玉鬘の裳着の儀」

こつしてその当日となつて、二条宮からも、こつそりとお使いがある。御櫛の箱など、急なことであるが、種々の品々をたいそう見事に仕立てなさつて、お手紙には、

「お手紙を差し上げるにも、憚れる尼姿のため、今日は引き籠もつておりますが、それに致しましても、長生ぎの例にあやかつて戴くということ、お許し下さるだろうかと存じまして。しみじみと感動してお聞き致しまして、はつきりしました事情を申し上げるのも、どうかと存じまして。あなたのお気持ち次第で。どちらの方から言ひましてもあなたはわたしにとって切つても切れない孫に当たる方なのです」

と、たいそう古風に震えてお書きになつてゐるのを、殿もこちらにいらつしやつて、準備をお命じになつてゐる時なので、御覧になつて、

「古風なご文面だが、大したものだ、このご筆跡は。昔はお上手でいらつしやつたが、年を取るに従つて、奇妙に筆跡も年寄りみて行くものですね。たいそう痛々しいほどお手が震えていらつしやるなあ」

などと、繰り返し御覧になつて、

「よくもこれほど玉くしげに引つ、掛けた歌だ。三十一文字の中に、無縁な文字を少ししか使わずに詠むということは難しいことだ」と、こつとお笑ひになる。

「第三段 玉鬘の裳着への祝儀の品々」

中宮から、白い御裳、唐衣、御装束、御髪上の道具など、たいそうまたとない立派さで、例によつて、数々の壺に、唐の薫物、格別に香り深いのを差し上げなさつた。

「ご夫人方は、みな思い思いに、御装束、女房の衣装に、櫛や扇まで、それぞれにご用意なされた出来映えは、優るとも劣らない、それぞれにつけて、あれほどの方々が互いに、競争でご趣向を凝らしてお作りになったので、素晴らしく見えるが、東の院の人々も、このようなご準備はお聞きになつてはいたが、お祝い申し上げるような人数には入らないので、ただ聞き流していたが、常陸の宮の御方、妙に折目正しくて、なすべき時にはしないでいられない昔気質でいらして、どうしてこのようなご準備を、他人事として聞き過していられようか、とお思いになつて、きまり通りご用意なされたのであつた。

殊勝なお心掛けである。青鈍色の細長を一襲、落栗色とか、何とかいう、昔の人が珍重した袴の袴を一具、紫色の白っぽく見える霞地の御小袿とを、結構な衣装箱に入れて、包み方をまことに立派にして、差し上げなされた。

お手紙には、

「お見知り戴くような数にも入らない者でございませんで、遠慮致しておりましたが、このような時は知らないふりもできにくうございまして。これは、とてもつまらない物ですが、女房たちにもお与え下さい」

と、おっとり書いてある。殿が、御覧になつて、たいそうあきれて、例によつて、とお思ひになると、お顔が赤くなつた。

「妙に昔気質の人だ。ああした内気な人は、引込んで出て来ない方がよいのに。やはり体裁の悪いものです」

と言つて、

「返事はおやりなさい。きまり悪く思うでしょう。父親王が、たいそう大切になさつていたのを、思い出すと、他人より軽く扱うのはたいそう気の毒な方です」

と申し上げなされる。御小袿の袂に、例によつて、同じ趣向の歌があるのであつた。

「わたし自身が恨めしく思われます。あなたのお側にいつもいることができなと思ひます」

ご筆跡は、昔でさえそうであつたのに、たいそうひどくちぢかんで、彫り込んだように深く、強く、固くお書きになつていた。大臣は、憎く思うものの、おかしいのを堪えきれないで、

「この歌を詠むのにはどんなに大変だつたらう。まして今は昔以上に助ける人もいなくて、思い通りに行かなかつたことだらう」

と、お氣の毒にお思ひになる。

「どれ、この返事は、忙しくても、わたしがしよう」

とおつしやつて、

「妙な、誰も氣のつかないようなお心づかいは、なさらなくてもよいことですの」

と、憎らしさのあまりにお書きになつて、

「唐衣、また唐衣、唐衣、いつもいつも唐衣とおつしやいますね」

と書いて、

「たいそうまじめに、あの人が特に好む趣向ですから、書いたのです」

と言つて、お見せなされると、姫君は、たいそう顔を赤らめてお笑いになつて、

「まあ、お氣の毒なこと。からかつたように見えますわ」

と、氣の毒がりなされる。つまらない話が多かつたことよ。

「第四段 内大臣、腰結に役を勤める」

内大臣は、大してお急ぎにならない気持ちであつたが、珍しい話をお聞きになつて後は、早く会いたいとお心にかかつていたので、早く参上なされた。装束の儀式などは、しきたり通りのことに更に事を加えて、目新しい趣向を凝らしてなされた。なるほど特にお心を留めていらつしやることだ。と御覧になるのも、もつたないと思つ一方で、風変わりだと思わずにはいらつしやれない。

亥の刻になつて、御簾の中にお入れなされる。慣例通りの設備はもとよりのこと、御簾の中のお席をまたとないほど立派に整えなされて、御酒肴を差し上げなされる。御殿油は、慣例の儀式の明るさよりも、少し明るくして、氣を利かせてお持てなした。たいそうはつきりとお顔を見たいとお思ひになるが、今夜はとても唐突なことなので、お結びになる時、お堪えきれない様子である。

主人の大臣、

「今夜は、昔のことは何も話しませんから、何の詳細もお分りなさらないでしよう。事情を知らない人の目を繕って、やはり普通通りの作法で」

とお申し上げなされる。

「おっしゃる通り、まったく何とも申し上げようもございません」

お杯をお口になさる時、

「言葉に尽くせないお礼の気持ちは、世間にまたとないご厚意と感謝申し上げますが、今までこのようにお隠しになっていらつしゃつた恨み言も、どうして申し添えずにいられましよう」

と申し上げなされる。

「恨めしいことですよ。玉裳を着る今日まで隠れていた人の心が」

と言つて、やはり隠し切れず涙をお流しになる。姫君は、とても立派なお二方が集まつており、気恥ずかしさに、お答え申し上げることがおできになれないので、殿が、

「寄る辺がないので、このようなたしの所に身を寄せて誰にも捜しても見えない気の毒な子だと思つておりました何とも無体なだしめけのお言葉です」

と、お答え申し上げなされると、

「まことにござつともです」

と、それ以上申し上げる言葉もなく、退出なされた。

「第五段 祝賀者、多数参上」

親王たちや、次々の、人々が残らずお祝いに参上なされた。思いを寄せている方々も大勢混じつていらつしゃつたので、この内大臣が、このように中にお入りになつて暫く時間がたつので、どうしたことか、とお疑いになつていた。

あの殿のご子息の中将や、弁の君だけは、かすかにご存知だったのであつた。密かに思いを懸けていたことを、辛いことも、また嬉しいことも、お思いになる。弁の君は、

「よくもまあ告白しなかつた」

と小声で言つて、

「一風変わった大臣のお好みのようだ。中宮とご同様に入内させなさうとお考えなのだろう」

などと、めいめい言つているのをお聞きになるが、

「やはり、暫くの間はご注意なさつて、世間から非難されないようにお扱い下さい。何事も、気楽な身分の人には、みだらなことがまゐるでしょうが、こちらこそちらも、いろいろな人が噂して悩まされようなことがあつては、普通の身分の人よりも困ることですから、穏やかに、だんだんと世間の目が馴れて行くようにするのが、良いこととございましよう」

と申し上げなされると、

「ただあなた様のなされように従いましよう。こんなにまでお世話いただき、またとないご養育によつて守られておりましたのも、前世の因縁が特別であつたのでしよう」

とお答えなされる。

御贈物などは、言つまでもなく、すべて引出物や、禄などは、身分に応じて、通常の例では限りがあるが、それに更に加えて、またとないほど盛大におさせになつた。大宮のご病気を理由に断りなされた事情もあるので、大げさな音楽会などはなかつた。

兵部卿宮は、

「今はもうお断りになる支障も何もないでしようから」

と、身を入れてお願い申し上げなされるが、

「帝から御内意があつたことを、ご辞退申し上げ、また再びお言葉に従いまして、他の話は、その後にでも決めましよう」

とお返事申し上げなされた。

父内大臣は、

「かすかに見た様子を、何とかはつきりと再び見たいものだ。少しでも不具なところがあつたらば、こんなにまで大げさに大事にお世話なされるまい」

などと、かえつて焦れつたく恋しく思い申し上げなされる。

今になつて、あの御夢も、本当にお分かりになつたのであつた。弘徽殿女御だけには、はつきりと事情をお話し申し上げなされたのであつた。

「第六段 近江の君、玉鬘を羨む」

世間の人の口の端のために、暫くの間はこのことを上らないように」と、特にお隠しになっていたが、おしゃべりなのは世間の人であつた。自然と噂が流れ流れて、だんだんと評判になつて来たのを、あの困り者の姫君が聞いて、女御の御前に、中将や、少将が伺候していらつしやる所に出て来て、「殿は、姫君をお迎えあそばさそうですね。まあ、おめでたいこと。どのような方が、お二方に大切にされるのでしょうか。聞けば、その人も賤しいお生まれですね」

と、無遠慮におつしやるので、女御は、はらはらなさつて、何ともおつしやらない。中将が、

「そのように、大切にされるわけがおりなのでしよう。それにしても、誰が言つたことを、このように唐突におつしやるのですか。口うるさい女房たちが、耳にしたらたいへんだ」

とおつしやる。

「おだまり。すっかり聞いております。尚侍になるのだそうですね。宮仕えにと心づもりして出て参りましたのは、そのようなお情けもあるうかと思つてなので、普通の女房たちですら致さぬようなことまで、進んで致しました。女御様がひどくていらつしやるのです」

と、恨み言をいうので、みなにやにやして、

「尚侍に欠員ができたなら、わたしこそが願ひ出ようと思つていたのに、無茶なことをお考えですね」

などとおつしやるので、腹を立てて、

「立派なご兄弟の中に、人数にも入らない者は、仲間入りすべきではなかつたのだわ。中将の君はひどくていらつしやる。自分からかつてにお迎えになつて、軽蔑し馬鹿になさる。普通の人では、とても住んでいられない御殿の中ですわ。ああ、恐い。ああ、恐い」

と、後ろの方へいざり下がつて、睨んでいらつしやる。憎らしくもないが、たいそう意地悪そうに目尻をつり上げている。

中将は、このように言つのを聞くにつけ、「まったく失敗したことだ」と思つので、まじめな顔をしていらつしやる。少将は、

「いちぢんの宮仕えでも、またとないようなご精勤ぶりを、いいかげんにはお

思いでないでしょう。お気持ちを鎮めになつて下さい。固い岩も沫雪のように蹴散らかしてしまひそうなお元氣ですから、きつと願ひの叶う時もありましよう」

と、にやにやして言つていらつしやる。中将も、

「天の岩戸を閉じて引つ込んでいらつしやるのが、無難でしょうね」

と言つて、立つてしまつたので、ぼろぼろと涙をこぼして、

「わたしの兄弟たちまでが、みな冷たくあしらわれるのに、ただ女御様のお気持ちだけが優しくいらつしやるので、お仕えしているのです」

と言つて、とても簡単に、精を出して、下働きの女房や童女などが行き届かない雑用などをも、走り回り、気軽にあちこち歩き回つては、真心をこめて宮仕えして、

「尚侍に、わたしを、推薦して下さい」

とお責め申すので、あきれて、「どんなつもりで言つているのだろう」とお思いになると、何ともおつしやれない。

### 「第七段 内大臣、近江の君を愚弄」

内大臣、この願ひをお聞きになつて、たいそう陽気にお笑いになつて、女御の御方に参上なさつた折に、

「どこですか、これ、近江の君。いちぢんに」

とお呼びになると、

「はい」

と、とてもはつきりと答えて、出て来た。

「たいそう、よくお仕えしているご様子は、お役人としても、なるほどどんなにか適任であるう。尚侍のことは、どうして、わたしに早く言わなかつたのですか」

と、たいそう真面目な態度でおつしやるので、とても嬉しく思つて、

「そのように、ご内意をいただきとつごいしましたが、いちぢんの女御様が、自然とお伝え申し上げなさるだるうと、精一杯期待しておりましたのに、なる予定の人がいらつしやるよつにつかがいましたので、夢の中で金持になつたような気がしまして、胸に手を置いたよつごいします」

とお答えなさる。その弁舌はまことにはきはきしたものである。笑つてしましそつになるのを堪えて、

「たいそう變つた、はつきりしないお癖だね。そのようにもおつしやつてくださつたら、まず誰より先に奏上したでしように。太政大臣の姫君、どんなにご身分が高かろうとも、わたしが熱心にお願ひ申し上げることは、お聞き入れなさらぬことはありませんまい。今からでも、申文をきちんとして、立派に書き上げなさい。長歌などの趣向のあるのを御覽あそばしたら、きつとお捨て去りなさることはありますまい。主上は、とりわけ風流を解する方でいらつしやるから」

などと、たいそううまくおだましになる。人の親らしくない、見苦しいことであるよ。

「和歌は、下手ながら何とか作れましよう。表向きのことの方は、殿様からお申し上げ下されば、それに言葉を添えるようにして、お蔭を頂戴しましよ」

と言つて、両手を擦り合わせて申し上げていた。御几帳の後ろなどにいて聞いている女房は、死にそうなほどおかしく思う。おかしさに我慢できない者は、すべり出して、ほつと息をついたのであつた。女御もお顔が赤くなつて、とても見苦しいと思つておいでであつた。殿も、

「氣分のむしゃくしゃする時は、近江の君を見ることによつて、何かと気が紛れる」

と言つて、ただ笑ひ者にしていらつしやるが、世間の人は、

「「自分で恥ずかしくて、ひどい目におあわせになる」  
などと、いろいろと言つのであつた。」